

初のホノルルマラソン体験談

— L'important, c'est de participer. —



2022年12月11日

フィニッシャーTシャツとメダル

医療法人イーハトーブ
仙台内科総合クリニック
鎌田 和彦

初のホノルルマラソン体験談

— L'important, c'est de participer. —

鎌田 和彦

12月8日(2022年)、パールハーバーならぬホノルルへ向け、いざ出発。

マラソンに挑戦というより参加しようと思っ立ったのは2ヶ月前の10月10日、昭和世代には馴じみの体育の日でした。幾多のフルマラソンの中でもホノルルは人数制限(抽選)なし時間制限なしというので、ジョギングは10数年ご無沙汰でスポーツジム加入歴も無いずぶの素人にはもってこいで、我が意を得たりと即断即決申し込みました。人生初のマラソン然も恐れ多くも大それたフルなので、目指すはいきなり膝を痛めるリスクの高い完走ではなく、身の程を知り端から完歩です。シューズ選びもランニング用ではなく敢えてウォーキング用を。種目は違えどマイヨ・ジョーヌに似たイエローのウェアにウクライナ支援も意識してブルーのリュック、ガーミンなるウォッチも購入して徐々に気運が盛り上がってきました。まず長距離ウォーキングに最適なコースは? 然もノンストップで! と思案し遂に思い至ったのは皇居でした。曲がりなりにも準備が整ったところで、本業の職務を遂行しながら2ヶ月後に迫った本番に向けて早速トレーニング開始。土曜日午前の外来診療と午後の訪問診療を終え最終新幹線で上京、翌朝バナナ2本となか卯のうどん2杯を平らげ、タクシーで桜田門に乗り付けウォーキングスタート。その日のノルマを果たし着替えする間もなく、気恥ずかしいまま新幹線に飛び乗りアイマスク姿(車内であまり遭遇しません)で仮眠を取り、日曜日午後には帰仙し夜まで訪問診療をこなすという日課ではなく週末課。1周5kmの皇居周回コースを最初の週は1周、次の週は2周、その次の週は3周といったように徐々に

距離を伸ばし、最後の週は8周(40km)を完歩し何とかなるだろうと自信めいたものが湧き、あとは12月11日のぶっつけ本番を待つのみ。因みに一寸見ランニング姿で東京駅に向かう際、「皇居ランナーなのにタクシーに乗せるのは、何十年もやってるけど貴方が二人目」などと運転手さんに皮肉られる始末でした。

マラソンに加えてハワイ行きも初めてで、まだ見ぬ憧れの地へと心躍るというより不安に満ちた旅立ちながら、無事到着。シェラトンワイキキで、かのビーチを見下ろしながらベランダでデッキチェアに身を横たえビールを飲み干しつつハワイのそよ風に吹かれ渚の音を聴きながら心地よく微睡んでいたのも束の間、悪夢のような本番前々日の夜。39度の発熱! 検査キットで陰性と一先ずほっとするも夜通し発汗続き全身汗まみれ、お腹も下り始め万事休す。はたと思い当たったのは、搭乗時の羽田空港保安検査でのハプニング。旅慣れていると自惚れてたはずが、久々の手荷物検査でバックパックのサイドポケットに残っていたペットボトルを指摘され、狼狽し何を血迷ったか人伝えに聞いていた「その場の面前で飲んで見せればOK」という野蛮な振る舞いが頭をよぎり即座に実行したのが災いの元かと。実はその忘れ去られていたペットボトルというのは、コロナ禍前にギリシャやアイルランドを旅した時から入りっ放しの賞味期限は疾うに過ぎた代物。運も尽きたかと思いきや、翌日には何とか体調回復し本番当日の朝を迎えられました。

12月11日早朝5時スタート。まだ暗い未明のホノルルの街を黙々とスタート地点へ向かう人の波、次第に人の群れとなり2万8千数百人(日本人5千5百人弱)でごった返していました。ホノルルマラソン第50回記念大会に因んでの歌あり花火ありのお祭り騒ぎを夢中で撮りまくってから、私は遠慮がちにしんがりから徐々にスタート。負け惜しみじみしていますが、タイムを競つ

て脇目も振らずに走るなどは自分の性^{しょう}に合わず、最初から走らずに歩いている人が周りに何人もいてほっと一安心。初めて見るハワイの刻々と変化する美しい朝焼けを始め風光明媚な景色を、生きているうちにはもう二度と見られまいと心に刻み一瞬一瞬を目に焼き付けながらタイムそっちのけで撮り続けました。

中途挫けそうになりながらも、ALOHA SPIRIT よろしく沿道に現地の家族が総出で腰掛け声援を送ってくれたのには、感謝感激しきり。日系人らしき人々にも励まされ、ひたすら無心に歩を進めながら、脳裏に去来するのはお定まりの苦労話。本業での経験を例にとると、遠きは、熊ヶ根（零細診療所ゆえ往診先を限定できず）で大雪のためスタックした車を夕闇がたちこめる前にと慌てて雪かきし、ぎりぎり^{こぎり}で間に合って脱出させたこと。高きは、エレベーターの無い4階の往診先で（丁度10年前厳寒の往診中に転倒、脛・腓骨骨折し手術・退院後、療養する暇もなくなかなか癒合せず）階段を数ヶ月に亘って松葉杖を使い毎回上り下りする羽目に陥ったこと。そんな思い出もさる事ながら、自分を何とか奮い立たせるために思い浮かべた遠い過去の記憶、二つ。

一つは、北アルプスと南アルプスの主峰はほとんど踏破した約40年前、医学部ワンデルング部に所属していた頃に参加した「80km狂歩

と称するイベントで、山形を夕刻出発し目的地仙台に向かって県境の峠を越え夜通しキャラバンシューズで足を痛めながら翌日の昼頃までかかって歩いた過酷な経験がものを言い、却^{かえ}って心の支えとなりました。

もう一つは、その昔78年も前の史実^{かこつ}に託けた格好になりますが、太平洋戦争において日本の兵隊さん達が南太平洋の見ず知らずの島でジャングルの中、灼熱の炎天下を重い荷を背負わされ塗炭の苦しみに耐えながら起伏の多い道なき道を何km歩かされたことか、その挙げ句ほとんど餓死。42.195kmなんぞ比ぶべくもなし、先人の苛烈な労苦^{しの}を偲べば今の辛さなど何のこれしき。現今人並みの生活を営んでいられるのは、過去の日本人の犠牲の賜物であると思いを馳せ首^{こぶ}を垂れるしかありませんでした。

現実^みに立ち返って、仙台ではお看取り（昨年45名）等がある場合の代診（往診）Dr.を予め^{あらかじ}お願いしておき、マラソン参加中も受け持ち患者さんからの連絡に備えてスマホを常に肌身離さずにいたのは言わずもがな、実際時差もあるなか何度も電話対応・指示に追われ不十分ながら務めを果たしました。

浮ついた気持ちで参加した私がゴール^{たど}に辿り着くには8時間55分を要しました（13,124位）。徹頭徹尾ただ歩くしか能がなく、腹^くを括ってあ



とは時間が解決してくれると念じつつひたすら歩き通した後は、疲労感より爽快感の方が優っていました。私が思うにこの時間はだいぶ寝坊した一晩の睡眠時間にほぼ相当し一夜の夢のような出来事で、一生に一度くらい（私にとっては二度目？）こんな経験をするのも悪くないと思った次第です。翌日の新聞に全完走（歩）者名とタイムが掲載され、最後のフィニッシャーは母娘と思しき日本人二人、同時に17時間7分余りもかかって何と深夜とも言うべき11時ごろ、脱帽の極み。どんな人にもとことん優しいマラソン大会、一押しです。それもそのはず、ホノルルマラソンは心臓病のリハビリと予防のため長距離をゆっくり走ることを目的として始まったとのこと。当初は最初で最後のハワイかつマラソンのつもりでしたが、毎年のように行く人の気持ちがよく分かりました。また今度いつハワイを訪れる機会があるのかと危ぶまれ余

命幾許もないかも知れぬ年齢に近づき始めた故の焦燥感があって、翌日まだ体力が多少残っていたのも手伝ってここぞとばかりにダイヤモンドヘッドを登って来ました。コロナ禍前には日々の診療から一時逃れんと年2～3回トーマスクック時刻表を片手に、若い頃から惹きつけられていたヨーロッパ、それも大袈裟に言えば凡ゆる芸術とか文化の薫りを辿って（かぶれ？）訪ね歩いたものでしたが、今回は取り立てて当てのない旅の醍醐味も知り、自然を満喫し身を委ねる至福のひとつときを堪能しました。次なる目標はサンティアゴ・デ・コンポステーラか、はたまた四国か。先ずはリタイヤが前提か？

満天の星や南十字星を観る機会に恵まれず夢は叶いませんでしたが、帰国日の朝、出発前から念願だった美しい虹がとうとう姿を現して見送ってくれました。

P. S. 私は、今や賢治というより翔平野球人生揺籃の地として誇り高い花巻の生まれ育ちですので、勝手に義理を感じWBCの日本での最終戦（対イタリア）のチケット（右投げ左打ち雄姿を拝める3塁側1階席）を手に入れ、東京ドームで応援してきました。2026年のWBCでは雄星・朗希と一緒に岩手三羽鳥の揃い踏みを目指しましょう。かつて同郷の新渡戸稲造（先祖は花巻）が願った、まさに「太平洋の橋とならん」と言わんばかりの大活躍。岩手、否世界の偉人、大谷万歳！

（青葉区上杉3-9-25
医療法人イーハトーブ 仙台内科総合クリニック）

【仙台市医師会報 2023.12 No.712 掲載分に加筆修正の上、転載】

